

2024年
2月

マナ通信



今月のマナ通信は、

◎12月の聖書日課：(詩篇、ゼパニヤ書、ハガイ書、ゼカリヤ書、マラキ書)
◎土・日曜日の学び：(喜びの知らせ) の感想です。

選民イスラエルにとってバビロンへの捕囚は大変な神からのお仕置きでした。選民として神殿もあり神から守られているからなにをしても守られていると云う傲慢な態度、気の持ち方が神の怒りを持ったものでした。神は近隣諸国を用いてユダヤ人に悔い改めるように警告を与えたのです。

前587年バビロニアのネブカデネザル2世によりエルサレムが陥落し、エホヤキンをはじめとするユダヤの民がバビロンに捕囚されました。その後、神殿も破壊されたのです。そして、前539年ペルシャのクロス王によりバビロンは陥落し、そのためユダヤ人に帰還を許可する勅令が出されました。

捕囚はエルサレムを離れ約半世紀異国の地での暮らしが待っていたのです。習慣の違う異国での生活は人々の考え方もむしばんでいきました。神殿がありません。そのため会堂が出来ましたが、人々は真の神からはなれて偶像礼拝に走る者が出てきたのです。現地人との結婚が大きな原因と思われるが、この地で多くの人の気持ちが変わったのです。

そして、やっと帰れる時がやって来ましたが人々のとった行動は様々でした。バビロンの地に留まる者、エルサレムに帰還する者、逆に東のペルシャ方面に行く者、その他いろいろの国に身を寄せたのです。

捕囚から帰還前後の預言者として、ゼカリヤは活躍しました。ゼカリヤは帰還民を励まし、勇気づけます。

「わたしはユダの家をカづけ、ヨセフの家を救う。わたしは彼らを連れ戻す。わたしが彼らをあわれむからだ。彼らは、わたしに捨てられなかった者ようになる。わたしが彼らの神、主であり、彼らに答えるからだ。」エフライムは勇士のようになり、その心はぶどう酒に酔ったように喜び。彼らの子らは見て喜び、その心は主にあって大いに楽しむ。「わたしは合図をして彼らを集める。わたしが彼らを贖ったからだ。彼らは以前のように数を増す。わたしは彼らを諸国の民の間にまき散らす。彼らは遠く離れてわたしを思い出し、その子らとともに生き延びて帰って来る。わたしは彼らをエジプトの地から連れ帰り、アッシリアから集める。わたしはギルアデの地とレバノンへ彼らを連れて行くが、そこも彼らには足りなくなる。彼らは苦難の海を渡る。海では波を打ち破り、ナイル川のすべての淵を涸らす。アッシリアの誇りは低くされ、エジプトの杖は離れ去る。わたしは主にあって彼らをカづける。彼らは主の名によって歩き続ける。——主のことば。」(ゼカリヤ10:6-12)

我々クリスチャンには傲慢にならないように患難が与えられます。旧約時代の選民イスラエルにも大変な患難を神は与えます。そこで、ゼカリヤは帰還した選民に神殿の建設の必要性を説きますが、選民は自分の家の建築や生活の為の働きに重きを置き、神殿建設は他からの妨害もあって一向に進みません。

18年の建設休止の時を経て神殿は完成します。主の宮が再建されても民の心は濁ったまま傷ついており、その生き様は喜びから遠く離れていました。

神殿が新しくなっても人の心は新しくされないのです。その場所には何か損なわれているのです。

ゼカリヤも多くの預言者が預言しているように救い主の到来を預言しています。それは建てられた神殿よりはるかに勝ることについてです。

神は旧約時代には、幕屋、神殿におられました。もう幕屋にも、神殿にもいません。汚れたからだを聖める為の動物の鮮血も要りません。我々クリスチャンは、贖われたのです。

「我あがなわれたり」：それは父なる神が御子をこの世に遣わされ、御子のからだ、血潮によって我々の罪を贖ってくれたのです。



「代価は全て支払われたり」：罪の代償としての代価は支払われ、裁判に於いて無罪を宣告されました。

しかし、それはその事実を認め受け入れた者にだけ与えられた神の「業」です。この神の業は捕囚から帰還し、心が病んでいる選民イスラエルだけを救うものでなくて、現在、過去、未来の全ての人間を対象とした、神のわざなのです。

これまで律法を守り、律法によって救われようとしていましたが、それには無理がありました。神は我々の出来ない事をして下さったのです。十字架上では律法に関することが起こっていたのです。

我々は十字架で主イエスにバプテスマされ、主と結びついたので。全てが一つ心で一体となりました。我々は現在いる立場をよく認識して、栄光は全て神にあることを喜び、神の御心に沿った生活を送りたいと思います。(畑中伸之)

幸いなことよ ヤコブの神を助けとしその神 主に望みを置く人。」(詩146:5)

(しかし、神の助けをあてにし、主に望みを置く人は幸いです／リビルバイブル訳)

〈みことばを味わおう〉から教えられ、励まされたことです。

ダビデは指導者として国を治め、他の国々への支配を広げました。しかし、彼が「ハレルヤ」と賛美する理由は自分自身の心が神様の御手の中にあり、神様ご自身が「統べ治めておられる」ことを知っていたからです、とあり、ダビデ自身、大きな罪を犯しましたが、それを悔い改めて赦していただいた、という経験をしています。

思いや願いのままに動いて、神様を悲しませてしまった自分を神様は赦してくださったことはダビデにとって忘れられない経験でした。その神様が自分の心を統べ治めておられることは、「いのちのあるかぎり」ほめ歌う理由となります。

試練の時ばかりでなく、日々祈りつつ心の中で神様の統治を経験出来る幸いを覚えつつ生活できたらと強く願わされました。(福島三弥子)



ゼカリヤ13章9節 「散らされずに残った3分の1を火の中に入れ試す」と言われています。「彼らはわたしの名を呼び、わたしは彼らに答える」と言われています。「まず私たちが主の名を呼び、次に主が答えて下さる」という順番を改めて確認しました。

「銀を練り、金を試すように試される」と言うことも、知ってはいますが、できるだけ平穩にぬくぬくと過ごしたいと思ってしまいます。

想像しなかったような試練に遭ったときも、最初に主の名を呼べる信仰を持てるように祈って行きたい

です。

「主に仕える、主を信じる」と簡単に言います。マラキ3章を読みつつ「高ぶる者を幸せ者と言おう、悪を行っても栄え、神を試みても罰を免れる」との御言葉に、私自身もかつて、「善人が苦しい思いをして、悪人が高笑いをしている」ように思うことがありました。今は、いやそんな事は一時的だと思い返します。

「神様を恐れることは、神様以外の誰をも恐れないという生き方」(119頁)と、徹底して証しできるようにでありたい。

どんなに厳しい試練にあっても、やせ我慢で元気そうに振る舞ったりせずに、100%主の愛による訓練と受け止められるように成長させて頂きたいです。(広瀬裕子)

律法は、神が人間にどのような生き方を要求しておられるかを示していました。一方で、それができないなら、罪に定めるということをします。

人は墮落してしまっていて、律法を守れなくなってしまっていますから、当然、私たちは罪定めされて罰を受けなければなりません。

ですから、律法が出来なくなっていたことは、私たちが罪責や処罰から解放し、義とされることです。さらに、いのちを与えて積極的にいのちの道、義の道を歩めるようにすることも、です。

救いはそれらを解決するもので、

①律法を守れない者に対して律法が要求している罪定めと処罰から解放して、義とされる(転嫁される)面と、

②これは積極的なものであり、いのちを与えて、御霊のみわざを通して歩むことを日増しに行われる面です。

①は、私たちが自分の罪の身代わりに主イエスが死んでくださったと信じた時に罪が赦され、そして義とされます。②は、信者がロマ書8章4節にあるように、御霊による働きを通して聖化の道を歩むようになること、これは漸進的なものとのことです。

これまでにロマ書講解中にある「キリスト教は積極的」という言葉に出会うたびに、“ン、それってどういうこと?”と書いておりましたが、それは、私たちが罪の赦しや義とされるだけでなく、それにも増して、いのちを与えられて、積極的な聖化の道を歩むようにされることだということのようです。

これらに関連した学びが、この後も続くようなので、ついてゆきます。(高橋美枝)

悪しき者のはかりごとに歩まず、罪びとの道に立たず、あざける者の座にすわらぬ人はさいわいである。

2 このような人は主のおきてをよろこび、昼も夜もそのおきてを思う。3 このような人は流れのほとりに植えられた木のノ時が来ると実を結び、その葉もしほまないように、そのなすところは皆栄える。……

6 主は正しい者の道を知られる。」(詩1:1-3,6)

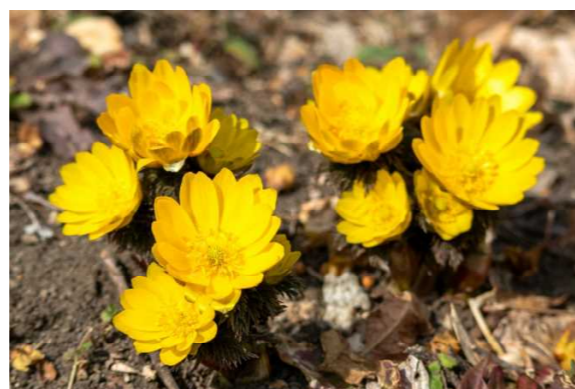
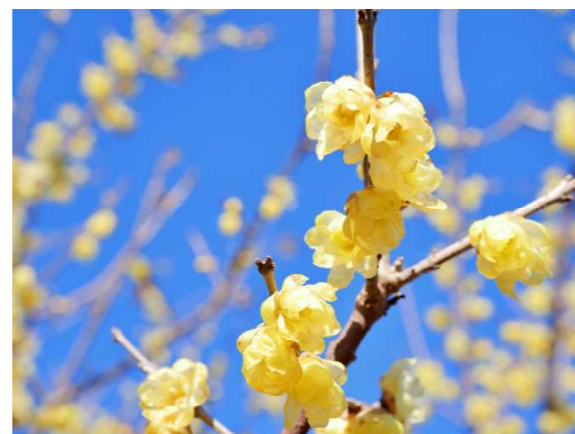
聖書のことばに親しみ続ける中で、周囲の皆さんの助言を受けたり、御言葉に基づく確信や平安もありますが、時々、聖書の中の「御告げ」をどのように受けとめれば良いのか分からない時もあります。

聖書のどの部分を読んでも、主が私に「御告げ」として語って悟らせようとしておられるのでしょうか。

日々、聖書によって私を養ってくださり、感謝の一言につきます。つらい事や苦しい事の多い中でも、聖書を通して私に語りかけて下さり、本当に心強く思います。

今後は、間違った「教え」に惑わされてしまわないよう、しっかりと聖書を理解したいと思います。

(木村邦夫)



マビデの子ヨセフよ、恐れずにマリヤをあなたの妻として迎えなさい。その胎に宿っている子は聖霊によるのです。マリヤは男の子を産みます。その名をイエスとつけなさい。この方がご自分の民をその罪からお救いになるのです。」(マタイ1:20-21)

罪を自分で清めることはできません。イエス様が身代わりで罰を受けて下さったので、信じる私たちは罪の支配から解放されています。

そのイエス様が、どのようにしてこの地上に来てくださったかを聖書は記しています。マリヤは戸惑い、夫ヨセフは悩みましたが、聖霊様が現れや、高齢のエリザベツのヨハネ出産など数々の神のご配慮がありました。そして彼らが神の見えない御業を信じ受け入れたことによって、イエス様は産まれました。

神の御子がこのようにして地上に降りられ、人々の間で生活し、人々の思惑の渦巻く中で十字架につかれました。神様の救いの御業がこのようにしてなされたことを私たちクリスチャンは知っています。

私たちの生活のさなかにも神の御業があると分かると、恐れや不安よりも安心や楽しさが勝っていくように感じます。(永井亮子)

幸いなことよ ヤコブの神を助けとし その神 主に望みを置く人。主は 天と地と海 またそれらの中のすべてのものを造られた方。」(詩篇146:5-6)

埼玉県飯能市から群馬県高崎市に引っ越しして14年経ちました。引っ越しと同時に始まったマナ通読も一区切りです。体調を崩した中での引っ越しでしたが、主に守られて、今日まで過ごして来る事が出来ました。

食生活を改善する事で、体調も良くなり、家事の他に、内職をする時間も与えられています。日々、いろいろな事がありますが、いつも主に信頼して、導かれつつ、歩いてゆきたいと願います。(外處トミ)

今日までは 主のお守りの 中にあり
これからも 主のみ旨の中に

2023年12月31日



群馬県から眺める浅間山の風景

主は心の打ち砕かれた者を癒し 彼らの傷を包まれる。主は星の数を数え そのすべてに名をつけられる。われらの主は偉大であり 力強く その英知は測り知れない。」(詩147:3-5)

世界をお造りになった主はすべてをご存じて、私たちの悩みや悲しみもすべて知ってくださいます。

主がいつもともにいて、守り導いてくださることを覚え、感謝します。(外處光歩)



主はご自分のすべての道において正しく そのすべてのみわざにおいて恵み深い方。

主を呼び求める者すべて まことをもって主を呼び求める者すべてに 主は近くあられます。

また 主を恐れる者の願いをかなえ 彼らの叫びを聞いて 救われます。」(詩145:17-19)

日々の生活において、神様は私たちに多くの恵みを与えてくださっていることを覚えて感謝します。主を賛美し、主にすべてをゆだねて歩む日々を送ることができたら幸いです。(外處結実)

主はご自分の民を愛し 貧しい者たちを救いをもって装われる。」(詩149:4)

主が愛されるのはへりくだった魂となった悔い改めた者たちです。私も自尊心が高く、高慢で恩知らずの悪人でしたが、ただ神様の憐れみのゆえに悔い改めに導かれ、聖霊様によって砕かれ、暗い闇の中で魂が浄められ、主イエス様が十字架で流された私の罪のための血潮によって、自らの罪深さと愚かさを深く知らされると同時に真理の知識も与えられ、体は罪に埋もれていても魂が聖なる神様を求めるようになっていました。

何一つ、自分ではできませんでした。私は神様を忘れて何度も裏切って罪を犯しては戒められることを繰り返していました。

しかし、神様は主イエス様の血潮によって私を救いへと忍耐強く導き続けて下さいました。長い年月の後に、目には見えませんが静かな平安が与えられていることに気が付きました。

今までずっと神様の御国に入れるか不安で仕方なかったのですが、知らずのうちにかすかな希望が持てるようになりました。

そして、うつむき気味で過呼吸で苦しかったこの世の時間から解放され、神様の憐れみと御愛の中で少しずつ深呼吸して歩めるようになりました。何という恵みでしょうか。この平安がもっともっと深くなりますように。(外處徳昭)



見よ、その日が来る。かまどのように燃えながら。その日、すべて高ぶる者、すべて悪を行う者は藁となる。迫り来るその日は彼らを焼き尽くし、根も枝も残さない。——万軍の主は言われる—— 2 しかしあなたがた、わたしの名を恐れる者には、義の太陽が昇る。その翼に癒やしがある。あなたがたは外に出て、牛舎の子牛のように跳ね回る。3 あなたがたはまた、悪者どもを踏みつける。彼らは、わたしが事を行う日に、あなたがたの足の下で灰となるからだ。——万軍の主は言われる。4 あなたがたは、わたしのしもべモーセの律法を覚えよ。それは、ホレブでイスラエル全体のために、わたしが彼に命じた掟と定めである。5 見よ。わたしは、主の大いなる恐るべき日が来る前に、預言者エリヤをあなたがたに遣わす。6 彼は、父の心を子に向けさせ、子の心をその父に向けさせる。それは、わたしが来て、この地を聖絶の物として打ち滅ぼすことのないようにするためである。」(マラキ4:16)

「長〜い」旧約聖書の一番最後はマラキ書です。そこに、「見よ、その日が来る。」とあります。

「その日」とは、神様が事を行う日のことであり、それはある者にとっては徹底的な神様のさばきの日であり、ある者にとっては完全な救いの日なのです。それが最終的に明確にされる日です。

第1に、主に対して「すべて高ぶる者、すべて悪を行う者」たちの運命は、藁のように、完全に焼き尽くされ、根も枝も残されないというさばきです。「高ぶる者」とは、どういう人のことでしょうか。

ルカ18章9-14節によれば、この人は神に祈る仕草はしたが、実際は神に語りかけていたのではなく、自分がいかに道徳的に正しく、宗教的にすぐれているかを自慢している人でした(ルカ18:9)。

自分がいかに罪深いかを悟らず、自分と周囲の人々とを比較して、自分のほうがまさっていることを誇っている者、へりくだって救いを求めることをしない者のことでしょうか。今日でも「敬虔な信者として、熱心に教会で様々な務めを果たしている」と自認している人でもあるかもしれません。

かまどのように燃え上がり、高慢な者と邪悪な者が根も枝もすべて滅ぼされる日が来る。その炎から決して逃れられないことを示しています。

第2は、「主の名を恐れる者」の運命です。「主の名を恐れる者」とは、前記のルカ18章の取税人によれば、罪深さは上記の高ぶる者と全く変わりないのですが、神の前に立った時、自分は全く価値のない者であると感じ、自分を恥ずかしく思い、自分の罪を自覚してへりくだり、「目を天に向けようともせず、自分の胸をたたき」、あわれみを求めて神に叫んだ。「神様、こんな罪人の私をあわれんでください」

驚くことに、その者の上には「神の義」が賜物として与えられました。そして、「義の太陽」が昇り、その翼による「癒し」がなされました。

「義の太陽」はメシア的表現で、聖書ではこの個所にしか使われていないものです。それは主イエスを指しています。主イエスこそ「義の太陽」です。この光はすべての人を照らす「まことの光」です。

また「翼」と訳された言葉(☒カーナフ)は、旧約では「わしの翼に載せ」(出19:4)、「御翼の陰に」(詩17:8等)とあるように、神様の保護を表す比喩として用いられています。

さらに「牛舎の子牛のように跳ね回る」は、牛舎から解放されて自由に跳び回る子牛にたとえられた「救いの喜び」を表しています。

このように、「その日」には、明確に「さばき」と「回復」、「光」と「やみ」の運命が分かれるのです。そのことを主は警告しているのです。

旧約聖書の最後は、①モーセの律法を思い出すようにという勧め(4節)と、②主の日の前に…エリヤを遣わすという約束(5節)で終わります。

イエス様は、旧約聖書の正しい理解を与えるために、変貌の山での経験をペテロたちに与えました。

変貌の山では、旧約の代表者であるモーセと預言者エリヤの両方が現れ、イエス様と語っています(ルカ9:28-36、マタ17:1-13、マコ9:2-13)。何を語っていたのでしょうか。

「エルサレムで遂げようとする最後のこと」十字架の死についてです(ルカ9:28)。これこそ、イエス様が来られた目的、旧約聖書の啓示の中心ではないでしょうか。

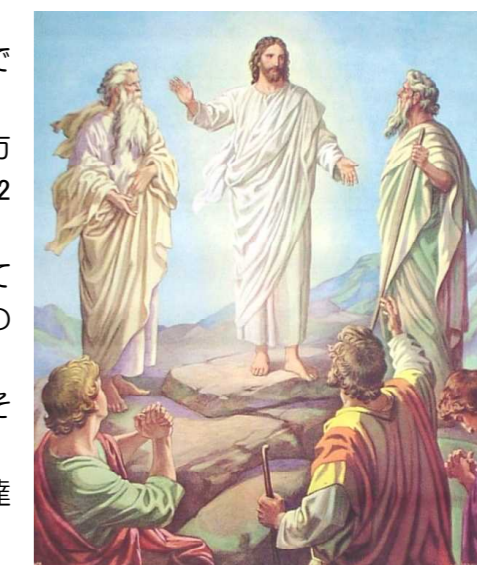
主は「律法や預言者」(旧約聖書)を廃棄するためではなく、それらを成就するために来たと言われました(マタイ5:17)。

旧約聖書で繰り返し語られていたことが、カルバリの十字架で達成されたのです。

私たちの罪を負い、私たちを律法の呪いから救い出すために命を捧げてくださったのです。何と感謝なことでしょう。(福島勲)



だれでも自分を高くする者は低くされ、自分を低くする者は高くされるのです。(ルカ18:14)



ディボーションガイド・マナ最終号の貴重なご感想をありがとうございました。
次回は「ロマ書3:20-25講解又は日々のみことば1月号」の感想を2月10日までに福島兄弟へお寄せ下さい。(永井)